



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	直示と参照の観点から見直す「の」「のだ」「ので」表現について
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 27, 143-155
Issue Date	2018-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71728
Type	departmental bulletin paper
File Information	143-156_yamashita.pdf



直示と参照の観点から見直す 「の」「のだ」「ので」表現について

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部 教授

山下 好孝

Reanalysis of Japanese Expressions NO, NODA and NODE from Deictic and Contextual Points of View

YAMASHITA Yoshitaka

abstract

In earlier papers (Yamashita [2016a], [2016b] and [2017]), I proposed the need for a deictic and contextual approach in Japanese syntax. In this paper I analyze Noun-“no”-Noun constructions, “noda”-sentences and “node”-expressions.

In previous studies these three constructions have been treated separately. In this article, however, I focus on the common function of the Japanese particle “no” which appears in all the constructions: it presupposes a reference point.

First of all, when the particle combines two nouns as in N “no” N, the first N functions as a reference point. The particle “no” itself has no specific meaning.

Secondly, the “no” of “noda”-sentences presupposes some situation as a reference point. The “noda”-sentence must be uttered based on this reference point. The difference between the following two sentences is that (1) is a sort of deictic sentence and (2) is a contextual sentence with expressed or unexpressed reference.

(1) Yamada-kun ga kita.

(2) Yamada-kun ga kita-no-da.

Finally I analyze “node”-expressions as a variation of a “noda”-sentence.

The “node” expression implies the reason for which the main sentence is uttered as a request or question.

1 「直示表現」と「参照表現」

言語社会学者、鈴木孝夫氏はアメリカ英語と異なるイギリス英語の難しさについて次のように述べている。

- 1) 私は仕事の必要から、アメリカの人類学、民俗学、言語学雑誌をよく読むが、内容がむずかしいやさしいは別として、英語そのものが分からないということは、まずほとんどない。ところが英国のものでは、説明の、いわゆる地の文の中に、何かしっくり理解できない箇所が時々出て来るのである。(…) イギリス人の英語が私にむずかしいのは、彼等に特有の思考的な枠組み (frame of reference) が私にまだ良く分かっていないからである。そして過去に偉大な文明を背負った言語は、実はすべてこの種の難解さを持っているのだ。

鈴木 (2017 : 229)

この場合のframe of referenceという言葉は言語表現の背後にある文化的なものを意味していると考えられる。そもそも言語というのは、人間の言語である限り、なにかを参照点 (reference point) として設定し、発話を構築している。犬や猿であれば、過去のことに言及したり、直前に言及された発話を否定したり、強調したり、確認したりする能力はもっていない。何かを参照しながら発話する能力は人類の言語に限られている。

筆者は山下 (2016a ; 2016b ; 2017) の先行研究で、発話者の現在の視点に立った「直示表現」と、何かを参照点とする「参照表現」の違いに基づいて、様々な言語現象を分析してきた。本研究ノートでは、直示と参照が関係する日本語の言語現象として助詞「の」を含む表現を扱う。まず名詞と名詞を接続する「の」の表現を扱う。次に、文末に「の」を含む表現が現れる、いわゆる「のだ文」について考察する。そして、その拡張形式として、従属節を構成する「のが、ので、のに、のを」等について考察を広げる。

日本語の表現の類型として、「の」を含む表現と、それを含まない表現が区別され、前者が参照表現であり、後者は直示表現であるという仮定をし、そこから導かれる論点について考察を進める。

2 助詞「の」で接続された名詞句

佐々木信綱の歌に次のようなものがある。

2) ゆく秋の大和の国の薬師寺の
塔の上なる一片の雲

この歌は、まず時間「ゆく秋」を設定する。その次に場所「大和の国」を設定し、更に「薬師寺」という特定の場所に徐々にフォーカスを絞っていく。最後に薬師寺の塔の上に読む者の視線を導き、最後にそこに流れる「一片の雲」を表現する。

この歌で助詞「の」が繰り返し現れる。「の」の前の名詞を「前項」、後ろの名詞を「後項」とすると、前項で大きな場を設定し、後項ではその場に含まれる事物を表現している。言い換えると、前項が後項を導く参照点になっているのである。普通の物語文でも、まず時間が設定され、その後で場所が設定される。時間が参照点となり場所が導入される。そして導入された場所が参照点となり、人物が導入される。

この順番はおとぎ話などでもよくみられるものである。

3) 昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

「時間」と「場所」を「の」でつなぐ場合、「時間」が前項になる場合の方が自然である。

4) 戦前の東京 1972年の札幌

5) ?東京の戦前 ?札幌の1972年

名詞と名詞を結ぶ「の」が現れるフレーズでは、前項が後項の参照点となり語句の解釈が容易になる。石黒（2016：193）は、多義語が多い外来語の場合も、前項を導入し、「文脈を強化する」つまり「参照するものを明確化」することによって正確に理解できると述べている。その例として、多義語「トップ」をあげている。

6) トップでゴールした／銀行のトップに収まった／トップでアクセルを踏んだ

この例の最初の「トップ」では、「[名詞] の [名詞]」構造が明示されていないが、「出場全選手のトップ」とすれば多義語を解釈する文脈が強化され誤解の恐れはなくなると主張する。最後の「トップ」は「車のギア」のことである。

別の例として、「タイム」の例もあげている。

7) 試合中にタイムを取る／50m走のタイムが早い／タイムを使った料理を食べた

この例の最後の「タイム」は「ハーブのタイム」とすればよいとする。助詞「の」を使うと前項が参照点になり、後項に来る名詞句の理解が促進されるのである。

助詞「の」は名詞と名詞を結びつけ、前項で後項の名詞の所有者、出自、所属、材料、内容、属性などを示す。さらに、文脈で理解可能な場合、後項の名詞が省略されることがある。しかしながら、前項と後項の意味関係によって、省略可能性に影響がある場合もある。

- 8) これは誰のノートですか? — ジョンのノートです。(所有)
ジョンのです。
- 9) これはどこのワインですか? — イタリアのワインです。(出自)
イタリアのです。
- 10) これはどこの車ですか? — トヨタの車です。(生産者)
トヨタのです。
- 11) この大学はどこの大学ですか? — 北海道の大学です。(所在地)
?北海道のです。
- 12) これは何の雑誌ですか? — コンピューターの雑誌です。(内容)
?コンピューターののです。
- 13) これは何のケーキですか? — 苺のケーキです。(材料)
?苺のです。

ここから考えられるのは、「参照表現」としての前項の持つ力の違いがこのような差を生み出しているということである。たとえば上記の「トヨタの車」という表現を考えてみよう。ご存知のように、「トヨタ」は世界的な自動車メーカーである。「トヨタの車」は「トヨタ車」というふうに「の」を使わなくても表現できる。そして、「一台のトヨタ」というメタファー表現も可能となる。「参照表現」の「トヨタ」だけで、後項が「車」であることが予想できる。

一方「北海道の大学」は「北海道大学」と同値ではない。「北海道」は、あくまでも後項と「の」で結合することで、「所在地」であることが理解できる。後項に現れる名詞句を予想させる力は、「トヨタ(の)」に比べて弱いと言わざるを得ない。

では次の表現はどうだろうか。

- 14) 銭形の親分 → 銭形の
- 15) イワンの馬鹿 → ?イワンの

14) は「銭形という姓の平次親分」という時代劇の登場人物のことである。劇中、「銭形の親分さん」とか「銭形の旦那」というような名前では呼ばれている。この句では前項が後項の「参照表現」として十分な機能をはたしていると言える。さらに同僚の岡っ引きからは「銭形の」という後項が省略された呼称で呼ばれることもある。

それに比べ15) はどうであろうか。「イワンの馬鹿」というのはトルストイの小説の題名で、菊池寛訳の青空文庫版では次のような出だしになっている。

- 16) むかしある国の田舎にお金持の百姓が住んでいました。百姓には兵隊の

シモン、肥満（ふとっちょ）のタラスに馬鹿のイワンという三人の息子と、
つんぽでおしのマルタという娘がありました。【原文のまま】

『イワンの馬鹿』の出だしでは、「馬鹿のイワン」というふうに表現されている。「イワン」の特徴を助詞「の」の前項で示した参照表現であると言える。一方、前項に「イワン」をおいた表現は通常の用法ではない。他にどのようなものがあるか考えてみよう。

17) 山下の馬鹿が、またへまをしやがった！

18) (間違って娘の大事な本を捨ててしまった母に)

お母さんの馬鹿！ どうして大事な本を捨てちゃったの！

このような用法を見ると、これらの用法は誰かが悪いことをした直後に使われたり、同じ過ちを何回もした人物に対して使われるようだ。そうだとすると、次のような図式が考えられないだろうか。

19) 山下がまたへまをした。→ “山下が馬鹿だ” → 山下の馬鹿

20) お母さんが大事な本を捨てた。→ “お母さんが馬鹿だ” → お母さんの馬鹿

後の節で見るように、助詞「の」は格助詞「が」と交替することがある。動作主を示す助詞「が」は文の中で使われるが、それが句になったとき、「の」で置き換わっているのではないだろうか。通常は所有関係を示す「の」が、連体修飾節中で主語を表す場合がある。それと同じような「がーの」交替が起こっているのではないかと考えられるのである。

以上、考察を進めてきた名詞と名詞を接続する「の」と、いわゆる「のだ文」とはまったく別物なのだろうか。次の節では、助詞の「の」と、「の」が文末に現れる「のだ文」の持つ音声的な特徴について検討する。

3 「の」と「のだ」の持つ音声的特徴

助詞「の」は、先行する名詞句のアクセント形式に影響を与えるという点で、他の格助詞とは異なる性質を持つ。

21) イタリア+の+雑誌→イタリアの雑誌

22) 日本（にほん）+の+雑誌→日本（にほん）の雑誌

23) 弟（おとうと）+の+雑誌→弟（おとうと）の雑誌

つまり、前項の最終音節にアクセントの滝がある場合、助詞「の」はそれを削除してしまう働きがあるということである。この現象は他の助詞には見ら

れない。

24) イタリア+と+日本 (にほゝん) → イタリアと日本 (にほゝん)

25) 日本 (にほゝん) +と+イタリア → 日本 (にほゝん) とイタリア

26) 弟 (おとうと) +妹 (いもうと) → 弟 (おとうと) と妹

ただし、1音節からなる語句が前項に生起する場合は、アクセントの滝の消失は認められない。

27) タイ (たゝい) +の+雑誌 → タイ (たゝい) の雑誌

28) 火 (ひ) +の+重要性 → 火 (ひ) の重要性

29) 日 (ひ) +の+重要性 → 日 (ひ) の重要性

前項のアクセント構造に助詞「の」が影響を与えるということは、助詞「の」で接続される二名詞句の結束を強くし、複合語化につながるとも言える。

では「のだ」文の場合はどうだろうか。

「のだ」文は、先行する文の最終音節にアクセントの滝を付与するという、助詞「の」とは逆の影響を与える。

30) この学生は書く (かゝく) +のだ → この学生は書く (かゝく) のだ。

31) あの学生は聞く (きく) +のだ → あの学生は聞く (きく) のだ。

32) この学生は書かない (かかゝない) +のだ → この学生は書かない (かかゝない) のだ。

33) あの学生は聞かない (きかない) +のだ → あの学生は聞かない (きかない) のだ。

この特性は、形式名詞「こと、もの、はず」などを伴った表現には見られない。

34) この学生は書く (かゝく) +はずだ → この学生は書く (かゝく) はずだ。

35) この学生は聞く (きく) +はずだ → この学生は聞く (きく) はずだ。

36) この学生は書かない (かかゝない) +はずだ → この学生は書かない (かかゝない) はずだ。

37) この学生は聞かない (きかない) +はずだ → この学生は聞かない (きかない) はずだ。

名詞を接続する「の」と「のだ」文には先行する名詞、または文の最終要素のアクセント形式に影響を与えるという共通点を持つ。そして、先行する要素が何らかの参照要素になっていると考えられる。この点について、次節で検討する。

4 「の」が文末に現れる「のだ文」

次の二つの文を比べてみよう。

38) 山田君が来た。

39) 山田君が来た の／んだ。

38) は起こった出来事をそのままに叙述している。つまり、いかなる参照点も含まない「直示」的な文であるといえる。一方、39) の文は、この文だけでは不自然な発話となり、何らかの状況、なんらかの先行文があることが想定される。

40) A：山本君は来られないそうよ。

B：それで、山田君が来たんだ。

41) A：あ、山田君だ！

B：山田君が来たんだ。意外だね。

40) では、「山本君が来られない」という発話を受けて、「山田君が来た」ことを納得している。41) では、「山田君が来る」ことは想定していなかったという驚きを表している。

田野村（1990）は次のように「のだ文」の特徴を述べている。

42) 「のダ」は、一般に、ことがら α の背後にはどのような事情があるか、問題の実情はどのようなものであるかという問題意識のもとで用いられる。つまり、話し手がその内容を知っているかどうかは別として、ある真相が定まっているはずだというとの想定がある。

田野村（1990：86）

そして、田野村（1990）は、この特徴を「既定性」と名付けている。

他方、野田（1997）は、「のだ文」はムードを表すとした上で、次のような表を提示している。この表で「P」は先行する文を意味する。「Q」は後に続く文を表す。また「P」と「Q」が顕在化している場合、「関連付け」られたとし、「P」が顕在化していない場合を「非関連付け」の例としている。

43)

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関連付け	Pの事情・意味としてQを把握する	Pの事情・意味としてQを提示する
非関連付け	Qを「既定の事態として」把握する	Qを「既定の事態として」提示する

野田（1998：67）

上記40)の文は、対人的ムードの関連付けの例として、聞き手に説明を与えている。一方、41)の例は、対事的ムードの非関連付けの例として、意外性を表していると言えよう。

しかしながら、本稿では「のだ文」をムード（モダリティ）の要素とは考えていない。「のだ」がモダリティ要素であるか否かについては、稿を改めて議論したいと思う。

いずれにせよ、「のだ」文のもつ「既定性」ということは重要であると思われる。つまり、「既定」の事態、発話を参照することによって「のだ」文が生み出されると言うことである。

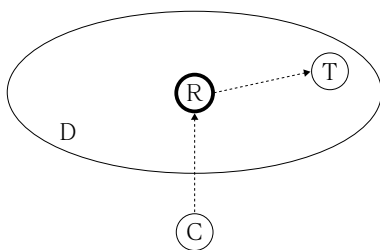
山梨（2017：126）は、参照表現に関連して、以下のように説明している。

44) 一般に、われわれが何かをターゲットとして探索する場合、常に見ているターゲットとしての対象が直接的に把握できる保証はない。実際には、そのターゲットに到達するために参照点（すなわち、対象に到達するための手がかり）を認知し、この参照点を経由して、問題のターゲットとしての対象を認知していく。

山梨（2017：126）

そして、それを図示したLangackerの図を示している。

45) 山梨（2017）記載のLangackerの図



C：認知主体 conceptualizer

R：参照点 reference point

T：ターゲット target

D：参照点によって限定されるターゲットの支配領域 dominion

では、逆にこのような参照点が介在しない、対象を直接に把握している文とは、言い換えると「のだ文」にならないのは、どのような場合であろうか。

- 46) 難しいようでしたら、私どもでいたします。 *いたすんです。
 47) あ、スーパーマンだ! *スーパーマンなんだ!
 48) 我々は正々堂々と戦うことを誓います。 *誓うのです。

46) は「申し出の文」の文である。理由を表す従属節は先行文脈を受けているが、申し出る行為は新たに提示する要素なので「のだ文」にはならない。
 47) は「発見の文」の文である。当然、先行文脈を参照しない。ただ過去の記憶を参照する場合は、発見の文でも「のだ文」が可能となる。

49) あ、こんなところに財布をしまってたんだ。

48) はいわゆる「遂行文」である。これは、発言した時点でその動作を行ったことになる遂行動詞 (performative verb) を述語に用いる。そのため先行文脈を参照することはない。

本節では、「のだ文」が文脈上の何らかの要素を参照する表現であることを主張した。次の節では、「のだ文」の統語構造について考察を行う。

5 「のだ文」のスコープ

- 50) 山田君が来た。(再掲)
 51) 山田君が来た の／んだ。(再掲)

前節で挙げたこれらの二つの文を比較すると、次のような構造が想定できる。

50) [山田君が来た] のだ。

そうすると、「の」は文を名詞化する接辞であると考えることができる。一見すると名詞修飾節と同じように思えるが、いくつかの点で異なる。

まず、一般の名詞修飾節に見られる「が」→「の」交替の現象がみられない。

- 53) これは 彼 (が／の) 書いた小説です。
 54) これは 彼 (が／*の) やったのです。

さらに、「のだ」文は、助詞「は」が示す主題の名詞をそのスコープに含むことができる。次の文は、筆者がかつて教えたアメリカの留学生の発話である。日本に留学に来たが、周りの日本人が英語で話しかけてばかりなので不満を覚えているという状況で私に言った文である。

55) *英語を話しに私は日本へ来ませんでした。

この文は次のようにしなければならない。

56) 英語を話しに私は日本へ来たのではありません。

上の 55) では「ません」という否定要素が直前の「日本へ来る」にかかっている。この学生が言いたかったのは「自分の来日目的は英語を話すことではない」ということである。したがって下の 56) のように「のだ文」を使用し、従属節「英語を話しに」の部分で否定出来るようにしなければならない。すると 54) の文構造は次のようになる。

57) [英語を話しに私は日本へ来た] のではありません。

すると、主題要素「私は」の部分も「のだ」のスコープの中に含まれることになる。この点も、「のだ」が通常の名詞修飾節とは異なる点である。形式名詞が用いられた次のような文で、主題要素は名詞修飾節の外に置かれるのである。

58) 私は [アルメニアに行く] つもりです。

59) ? [アルメニアに私は行く] つもりです。

もちろん、「は」が対比を表す要素であれば名詞修飾節内に生起することは可能である。

60) [アルメニアに私だけは行く] つもりです。

さらに、59) 文を「のだ文」に転換すると、不自然さは軽減される。

61) [アルメニアに私はいくつもり] なんです。

また、ある種のモダリティ表現も、「のだ文」に転換することで文法的な文となる。

62) *彼はアルメニアに行きたい。

63) 彼はアルメニアに行きたいんだ。

これらのことから、文末の「のだ」要素には、先行する文を従属節化する働きがあることが想定される。

次の節では、「のだ」文が完全な従属節として機能している例について考察する。

6 「のだ」文が従属節に現れる場合

主節を形成する「のだ文」が従属節となる場合、非常に多くのバリエーションがあることは、先行研究でも述べられてきた。

64) ので、のに、のが、のを、のだが、のだけど、のだから、のなら、
のだったら、のであれば、等

本節は理由を表す「ので」節と、その逆接となる「のに」に関して考察をすすめる。他の形式に関しては、今後の研究で扱う予定である。

「のだ」文のスコープに入る要素には、丁寧体は通常来ない。

65) その本は もう 読んだ／＊読みました んです。

「のだ文」が従属節で使われても同様である。

66) この子は 難しい漢字を 書く／＊書きます のも 出来ます。

もちろん従属節であるため、主題要素をスコープ内に置くことは出来ない。

67) [彼が／＊彼は 泣いている] のを 見てみたい。

しかし、理由を表す「ので」に先行する文では、丁寧体の文も可能だし、「は」でマークされた主題要素も生起する。

68) [彼は 今日 来ません] ので、明日またいらしてください。

しかし順接「ので」の逆接表現「のに」の場合は、丁寧体と主題の生起に制限がある。

69) ＊[彼は 今日 来ません] のに、わざわざ来てくださったんですか？

70) [彼が 今日 来ない] のに、わざわざ来てくださったんですか？

こういった理由で、「ので」表現は「のだ」文とは関係がないと見る意見もある。しかし、「ので」は「のだ」文と共起しないことから、やはり「のだ」文のバリエーションと考えるほうが妥当であろう。

71) ＊[彼は 今日 来ないんです] ので、来ていただいても困ります。

しかし、類語表現である「から」を使った文では、「のだ」と共起しうる。

72) [彼は今日来ないんです] から、来ていただいても困ります。

このような理由を表す「ので」表現の特徴は、「から」表現と意味が非常に近いことから生み出されたのではないだろうか。

しかし一方で、理由を表す「ので」は「から」よりも丁寧であると感じられている。

73) すみません。頭が痛いので 早退してもいいでしょうか。

74) ??すみません。頭が痛いから 早退してもいいでしょうか。

ここでも第4節で提示した、「のだ」文の持つ「なんらかの参照点を提示する」という機能によって、ある事態との関連があることを示唆するとニュアンスが出ているのであろう。従って「から」のような直接的な表現ではなく、ある種の「丁寧さ」が醸し出されると考えられる。

このような「のだ」文の持つニュアンスは、以下のような「前置き表現」でも発揮される。

75) 金閣寺に行きたいのですが、どのバスに乗ったらいいですか？

76) 料理を習いたいののですが、いい学校を紹介していただけませんか。

「何かを参照して表現する」ということは、直接的な表現を避け丁寧さを生み出している。逆に、直接的な表現では、「のだ」は現れない。

77) (ナイフで手を切って) 痛い！／＊痛いんだ！

直示と参照という観点から言うと、最後の例文は典型的な直示的文と言うことが出来よう。

7 結語

本稿では、直示と参照という二つの観点から

①句内の参照表現「の」

②談話内の参照表現「のだ」

を扱った。そして、「のだ」のバリエーションとしての「ので」にも言及した。

今後の課題は、文内の要素の参照表現として、主題を示す「は」も同様の観点から考察することである。

日本語教育でも、「は」と「か」の違いについてよく言及される。大まかな

見通しとして、「は」は参照表現であり、「が」は直示表現と言えるのではないだろうか。これに対する考察も今後の研究の課題としたい。

参考文献

- 石黒 圭 (2016) 『語彙力を鍛える』 光文社新書
 鈴木孝夫 (2017) 『閉ざされた言語・日本語の世界』【増補新版】 新潮社
 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ 「のだ」の意味と用法』 和泉選書
 野田春美 (1997) 『「の（だ）」の機能』 くろしお出版
 山下好孝 (2016a) 「直示と参照に基づく日本語指示詞の再検討」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 23巻、pp51-62
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62975>
 山下好孝 (2016b) 「直示と参照に基づく「だけ」と「しか～ない」の意味解釈」『北海道大学国際教育研究センター紀要』 20巻、pp93-102
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65698>
 山下好孝 (2017) 「直示と参照に基づく「前（まえ）」と「後（あと）」の意味分析」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 26巻、pp141-152
 山梨正明 (2017) 『新版 推論と照応』 くろしお出版

(平成30年4月16日受理、平成30年6月1日採択)

